

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 9 日現在

機関番号：92720

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K11951

研究課題名(和文) 遺伝看護に関するコンピテンシー向上のための継続教育モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of continuing education model for improvement of genetic nursing competency

研究代表者

竹本 三重子 (Takemoto, Mieko)

医療法人沖縄徳洲会湘南鎌倉総合病院(臨床研究センター)・その他臨床研究・部長

研究者番号：20279706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、一般看護師に遺伝看護に関する実態調査を行い、遺伝看護実践能力向上のための継続教育モデル構築を目指した遺伝看護研修会の評価から有効性を明らかにすることを目的とした。その結果、過去の遺伝看護研修の経験者は遺伝看護の認識も実施も割合が高く、他は遺伝相談の対応はできないが遺伝看護の知識の必要を考えていた。遺伝看護研修会の前後比較では、遺伝への興味関心理解が高まり、遺伝への考えの変化が生じており、遺伝への認識、遺伝の基礎知識、遺伝看護実践能力の向上が確認され、遺伝看護の知識と事例検討を繰り返し行う方法での継続教育の有効性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

急速に進む遺伝医療の中で遺伝性の疾患患者・家族あるいは遺伝に関する悩みや課題を抱えた人々がいつでもどこでも援助を受けられるような体制を整えるために、遺伝看護実践能力を備えた一般看護師が育成されることが急務である。これを実現するためには今回の遺伝看護研修会のような継続教育は有効であり、将来の遺伝看護の拡大・発展に貢献することが予測される。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to conduct a survey of general nurses regarding the actual state of genetic nursing and clarify the usefulness of workshops in order to build a continuous educational model to improve competencies in genetic nursing practice. The results showed that nurses who had previous training in genetic nursing were generally highly recognized and frequently practiced it. Other nurses were unable to manage genetic counseling and recognized the necessity of knowledge of genetic nursing. A comparison between participants before and after the workshop in genetic nursing showed that interest in genetics was elevated and that nurses' perception of genetics had changed; further, their recognition of the importance of genetics, basic knowledge of genetics, and competencies in genetic nursing practice had improved. Thus, the study suggested the usefulness of continuous education by repeatedly providing opportunities to improve nurses' knowledge of genetic nursing and to study cases.

研究分野：遺伝看護学、成人看護学、緩和ケア

キーワード：遺伝看護実践能力 遺伝看護 一般看護職者 継続教育

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、遺伝医療分野は急速に発展し、遺伝学は研究の場から一般社会の場へ広く利用できるような時代になった。そのため近い将来遺伝学はすべての保健医療専門職が遺伝サービスを提供する上で身につけていなくてはならない共通の知識とされると言われている。

看護においても、遺伝に関する悩みや問題を抱えた人々へのケアを専門看護師が担う特別な役割と捉えるのではなく、今後、一般の看護職者の役割としてますます重要になってくると考えられる<sup>1)2)</sup>。しかし、遺伝看護の教育は、従来から看護基礎教育のカリキュラムの中に科目として位置づけられていない。そのため遺伝に関する悩みや問題を抱える人々への援助をするための看護師の知識や看護実践能力<sup>3)4)</sup>は希薄な現状にある。

これまでの遺伝看護の教育に関する研究は、看護職に対する遺伝の教育の必要性に関する研究<sup>5)</sup>、看護職者に必要な遺伝看護実践能力の研究<sup>6)</sup>、一般看護職者を対象とする遺伝看護教育プログラムの開発<sup>7)</sup>、および実施と評価の研究<sup>8)</sup>が行われている。これらの研究の中で、遺伝看護の教育プログラムが開発されてはいるが継続的に活用されておらず、医療のあらゆる領域において遺伝の問題で悩む人々への全人的・包括的なアプローチが必要であるにもかかわらず、実際の臨床現場には遺伝医療・遺伝看護の知識と実践が浸透していない。

遺伝看護がなかなか浸透しない現状を少しでも打開するために、一般病棟看護チームにおいて看護の実践的内容に影響力があると思われる一般看護師の中堅看護師が遺伝看護のコンピテンシーを高めることによって病棟全体の遺伝看護への理解が高まる方向へ向けることが可能ではないかと考え、本研究に取り組むこととした。

### 2. 研究の目的

【調査1】では、A県内一般看護師の遺伝看護に関する認識と実践の実態を明らかにすることを目的とした。

【調査2】では、遺伝看護実践能力向上のための継続教育モデル構築を目指した遺伝看護研修会を実施しその評価を行い、一般看護師に対する遺伝看護教育の有効性を明確にすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

#### 【調査1】

遺伝看護コンピテンシーに関する質問紙を作成し、県内の200床以上の病院に勤務する一般看護師を対象として無記名自記式質問紙調査を実施した。調査項目は、基本属性10項目(年齢、性別、看護経験年数、最終学歴、現在の職種、職位、卒後研修、過去の看護経験、専門資格、所属病院の遺伝部門の有無)と個人特性7項目(遺伝性疾患患者との遭遇経験、遺伝性疾患の種類、遺伝の相談を受けた経験、相談を受けたときの対応、対応の方法と困ったこと、今後の遺伝の相談への対応能力、遺伝に関する知識の必要)、および先行研究(有森ら, 2004)による「看護職者に求められる遺伝看護実践能力」をもとに以下の7領域48項目とした。1領域;相談者の希望の明確化5項目、2領域;相談者の理解の支援3項目、3領域;精神的支援11項目、4領域;正しい遺伝情報の提供と交換3項目、5領域;生活支援20項目、6領域;他機関への紹介と連携3項目、7領域;自己研鑽3項目である。これらの項目について調査票Aでは認識を問うために「看護師の役割だと思うか」を聞き、調査票Bでは実施状況を問うために「あなたは実施しているか」と問い、4件法で回答を求めた。

分析方法は、基本属性と個人特性について記述統計量を算出した。遺伝看護能力に関する48項目について信頼性係数を算出し、さらに、基本属性および個人特性のそれぞれと遺伝看護実践能力のA認識およびB実施との関連についてMann-WhitneyのU検定、Kruskal-WallisのH検定を行い、有意差がある場合は多重比較を行った。統計分析には、SPSS 25を使用した。

#### 【調査2】

A県内10施設の看護師に遺伝看護研修会への参加と調査への協力を依頼し、遺伝看護研修会の開催前後に調査を行った。遺伝看護研修会は2回行い、1回当たり2つのテーマで講義と事例を用いたグループ討議を実施した。1回目のテーマは、先天性異常、大腸がん、2回目のテーマは、出生前診断、乳がんであった。

調査内容は研修会への評価として講義の興味関心と理解の程度、普段の遺伝看護の実施状況、本日の学習が今後役に立つか、遺伝看護への考えの変化について調査した。さらに遺伝の基礎知識(16項目)および遺伝への認識1)(14項目)、遺伝看護実践能力2)(6項目)について調査した。分析は、遺伝の基礎知識3)(16項目)については×式で正答1点で総得点16点とし、研修前後の得点が増加していれば、向上・効果ありとした。参加者の特性と遺伝の知識、の合計得点の関連を検討するため、2元配置分散分析を行った。統計的分析にはJMP14 for Windowsを用い、両側有意水準は5%とした。

### 4. 研究成果

#### (1) 調査1

調査1の対象者2550名中回収数1061名(回収率41.6%)で、有効回答は737名有効回答率28.9%であった。回答者は男性より女性が多く、看護職経験年数平均13.2±2.8年、遺伝

看護の卒後研修経験 2.8%であった。遺伝性疾患患者との遭遇経験 50.7%、遺伝の相談を受けた経験がない 78.4%であった。今後遺伝看護の知識が必要と思う 65.2%であった。遺伝看護実践能力 48 項目の Cronbach 係数 0.94 で信頼性が確認された。

今回、遺伝看護実践能力の認識および実施について対象者の背景による比較をしたところ、遺伝看護実践能力の実施得点が高い者は、遺伝看護の研修経験者であった。遺伝性疾患患者との遭遇経験の有無では認識・実施得点に有意差がなかったが、相談経験がある者は遺伝看護の認識も実施も高い傾向にあった。遺伝性疾患患者に遭遇しただけでは、遺伝看護としての認識や実施の向上にはつながりにくいと考えられた。また、6 割以上が遺伝看護の知識が必要と回答しているにもかかわらず、今後の対応能力の面では「全くできない」「わからない」と答えた割合が多かったことから看護師が遺伝性疾患患者と遭遇しても遺伝に関する問題状況や看護の必要性に気づくことができない可能性があると考えられた。今後は、遺伝看護を考えるきっかけや動機づけとなる学習の機会を支援する必要があると考えた。

## (2) 調査 2

遺伝看護研修会への参加者は、延べ 47 名でそのうち研修会に 2 回とも参加しかつ完全回答が得られた 16 名 (68.0%) を研究対象とした。研究対象者の背景は、20 歳代 4 名、30 歳代 9 名、40 歳代 3 名で、看護師 9 名、助産師 7 名であった。

研修会の評価として、遺伝看護の講義への興味関心、講義の理解、普段の遺伝看護の実施、今日の学習が看護実践に役立つ、遺伝への考えの変化についての回答では、遺伝看護への興味関心と理解、遺伝への考えの変化について有意差がみられた。

クロンバック 係数は遺伝知識 (0.934)、遺伝への認識 (0.811)、遺伝看護実践能力 (0.963) であった。研修会前後の比較では、遺伝の基礎知識は、2 回目研修前 ( $12.94 \pm 2.74$ ) と 2 回目研修後 ( $13.50 \pm 2.58$ )  $p < .0001$  で有意差があった。遺伝への認識は、1 回目の研修前 ( $4.61 \pm 0.91$ ) と研修後 ( $4.72 \pm 0.71$ )  $p < .0008$  で有意差があった。遺伝看護実践能力は、1 回目研修前 ( $5.56 \pm 2.54$ ) と研修後 ( $5.36 \pm 2.57$ )  $p < 0.01$ 、2 回目研修前 ( $5.81 \pm 2.89$ ) と研修後 ( $6.43 \pm 2.69$ )  $p < .0001$  で有意差がみられた。

以上のように、研修会の前後比較では、遺伝への認識 (1 回目)、遺伝の基礎知識 (2 回目)、遺伝看護実践能力 (1 回目と 2 回目) の向上が確認された。年代別、職種別に遺伝への認識、遺伝の基礎知識、遺伝看護実践能力それぞれの合計得点の平均値について 1 元配置分散分析を行った (表 3~5) とするところすべてにおいて有意差がみられなかった。

研修会の評価では、参加者の興味関心、理解、考えの変化について向上したことが確認できた。これらの変化の背景には、参加者のほぼ全員が看護部を経由した情報を得て自主的に参加した者であったことから、もともと遺伝看護に対する関心の高い人の参加だったことが関連していたと考えられた。研修会事前事後に調査した遺伝の基礎知識、遺伝への認識、遺伝看護実践能力については、クロンバック信頼係数が 0.8 以上であり信頼性が確認できた。研修会後の遺伝への考えの変化は 1 回目より 2 回目の得点が高く、遺伝の基礎知識、遺伝看護実践能力も前後で上昇し有意差があったことから、このような研修会による学習の効果が確認できたと考えられた。今回の遺伝看護研修会は、事例検討会の内容と講義を関連づけて学習できるようなグループ学習の形態で情報共有や話し合いを進めた。このように遺伝看護の知識を得る学習後に討議を繰り返す学習方法は、事例に即した理解を助け、グループでの情報の共有をしながら討議を進めることで単に知識の吸収にとどまらず、日ごろの看護経験を語る中で遺伝看護に関連することも想起できる機会となり、より深く考える契機となっていたものと考えられた。こうした学習方法は、遺伝看護に関する理解や関心を高め、遺伝の基礎知識や遺伝看護実践能力を高める可能性が示唆された。

課題としては、一般看護師が継続的に繰り返し学習する機会が少ないこと、疑問があった時に気軽に質問できる場所も少ないなどがあげられる。今後も課題を明確にしながら遺伝看護継続教育方法を醸成していく必要性が示唆された。

## 文献

- 1) 櫻井晃洋：医療関連企業における遺伝医学研修とその意義、日本人類遺伝学会第 50 回大会抄録, p144, 2005.
- 2) 有森直子ほか：看護職者に求められる遺伝看護実践能力 一般看護職者と遺伝専門看護職者の比較、日本看護科学学会誌, 24(2), 13-23, 2004.
- 3) 森由紀ほか：遺伝に関する保健師の意識調査、地域連携を視野に入れた研修会前後での認識を比較して、日本遺伝看護学会誌, 4(1)16-28, 2006.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹本三重子、二村良子、佐藤里絵
2. 発表標題 一般看護師の遺伝看護実践能力向上を目指した遺伝看護研修会の評価
3. 学会等名 日本看護医療学会第21回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹本三重子、二村良子、名倉真砂美、佐藤里絵
2. 発表標題 一般看護職者の遺伝看護に関する認識と実践
3. 学会等名 日本遺伝看護学会第17回学術大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	二村 良子  (nimura ryoko)	四日市看護医療大学	
研究協力者	名倉 真砂美  (nakura masami)	元三重県立看護大学	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	佐藤 里絵  (sato rie)	三重県立総合医療センター	